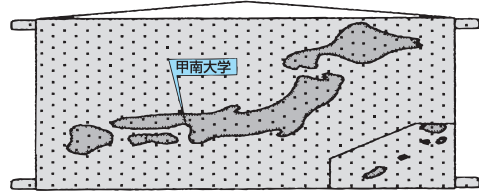


Zephyr

〈第83号〉

ゼフィール・にしかぜ



<https://www.konan-u.ac.jp/kilc>

《特集＊各言語文化圏における人生の節目の行事》

★所長からのメッセージ：初老祝いと十三参り	佐藤 泰弘	2
〔ドイツ語〕学校という社会への第一歩：ドイツの基礎学校への入学	藤原三枝子	3
〔フランス語〕フランスにおける人生の節目の誕生日の祝いについて	中村 典子	4
〔中国語〕中国語文化圏における人生の節目の行事	胡 金定	5
〔韓国語〕韓国社会における節目の誕生日の祝い	金 泰虎	6
〔日本語〕「人生の節目」考	谷守 正寛	7
世界の有名な研究所（2）	中村 典子	8

甲南学園創設者

平生鈞三郎

「世界に通用する

紳士・淑女たれ」



「英語＋1（第2外国語）」
教育プログラム

「使える外国語教育」

国際言語文化センター機関紙（年3回刊行）

外国語教育の目標としての異文化理解

ドイツ語教育において重視されている概念に、「ランデスクンデ」(Landeskunde)があります。いわゆる「地域研究」と理解されることもありますが、日本語への置き換えがむずかしいために、そのままランデスクンデと呼ぶことが多い概念です。「コミュニケーション・アプローチ」に続く（あるいはコミュニケーション・アプローチに含む場合もありますが）「異文化間アプローチ」による外国語教育では、重要な役割を担っています。このアプローチでは、4技能5領域の言語スキルの習得を主目的とする取り組みとは異なり、その名前が示すように異文化が中心テーマとなります。この際、対象言語の文化を一方的な知識として受け入れるのではなく、自分の言語文化や第三の言語の文化との比較等によって、それぞれの言語文化にある根源的なもの、あるいは違いの根底にある共通性について、あれやこれやと思索をめぐらす内省的なアプローチをとります。こうした深い思考によって、見える景色が広がっていくと考える「複眼的な思考」の育成は、1994年に発足した国際言語文化センターの教育理念でもありました。外国語教育のこのような目標は、2001年にヨーロッパ評議会が発表して以来、日本を始め世界の外国語教育に大きな影響を与えているCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）の理念「複言語・複文化」に通じるものです。本号のテーマ「各言語文化圏における人生の節目の行事」も、自文化や他の文化との比較等をとおして読むことで深い理解や面白さに繋がると考えています。

（藤原 三枝子）



初老祝いと十三参り



全学教育推進機構長・国際言語文化センター所長 佐藤 泰弘

もう何年も前のことになりますが、しばらく会ってない従兄弟から「初老祝い」が届きました。小説で初老の男性が出てくると「おじいさん」のイメージです。私は初老という年齢ではなかったし、何のお祝いをもたらったのか分かりませんでした。なにかの間違いではないかと思いつつ辞書を調べると、初老というのは40歳のことと説明されています。従兄弟は私よりずっと年下で、自分が初老を迎えたことを記念して「初老祝い」を届けてくれたのです。この時に初めて、初老が年齢の異称であることや、初老を祝う習慣があることを知りました。

20歳を意味する弱冠が「弱冠16歳」などと誤用されるように、40歳の異称である初老もまた誤用されていると言うこともできます。しかし、それは偉そうな物言いです。言葉とはそのように変化していくのですから。

従兄弟の家、つまり叔母の婚家は愛知県の旧家なので、このような風雅な習慣を残しているのだろうか。それとも、愛知には初老祝いが広く残っているのだろうか。一度だけ訪れたことのある叔母の家を思い出しながら、そんなことを考えていました。

日本史を専攻していても博学とはほど遠いので、初老祝いと同じように、突然に経験して驚いたことは数え切れません。その一つに十三参りがあります。

十三参りは子どもの成長を願い、13歳の時に虚空蔵菩薩を詣でて知恵を授かる行事です。虚空蔵菩薩は福德と知恵を司り、僧侶が経典を記憶する力を増す虚空蔵求聞持法こくうざうぐもんじほうという修法もあります。氏神に参詣する七五三が各地で行われているのに対し、十三参りは京都・東北南部など地域的な限定が強いとのこと。私が暮らす京都では、虚空蔵菩薩を本尊とする、嵐山の法輪寺に参詣します。

十三参りは江戸時代に広まったとのことですが、法輪寺への信仰は平安時代から見えます。藤原宗忠むねただ（1062～1141）という貴族が書き残した日記『中右記』には、承徳2年（1098）5月19日に法輪寺に参詣し、一晚参籠して、翌日に帰洛したことが記されています。

今日、晩頭、法輪寺に参詣す。四位少将、並びに太郎童、二郎童、相ひ具す。終夜、堂中に在り。祈り申す所は、二願あり。一つは、生々世々在々処々、法華経に値遇を得、身た纏とひ先世の業に依り、六道を輪廻するも、深く法華経を持し、一時と雖も敢て忘れず。一つは、必ず臨終の時、正念に安住し、極楽に往生せん。就中、虚空蔵菩薩、殊に臨終正念の願あり。深く此の事を信じ、往き詣づる所也。抑も往日、少年の昔、度々、此の堂舎に参詣し、才学の事を祈り申す。頗る少分なるも相ひ叶ふ如し。今に於いては、偏に現世の事を止め、只往生の願を祈る。菩薩の悲願、必ず引摂を垂れん。

この時、宗忠は37歳であり、22歳になる甥の宗輔むねすけと、童である（元服していない）2人の息子—14歳の宗能むねよしと12歳の宗成一むねなり—を同行して法輪寺に参詣しました。宗忠は政務・儀式に詳しい有能な貴族として活躍し、晩年には右大臣にまで登りました。彼は若いときに学問に励み、度々法輪寺に参詣して虚空蔵菩薩に「才学のこと」を祈りました。40歳が近づいた宗忠は、現世のことではなく極楽往生を願ったのです。宗忠が伴った若い甥と二人の息子は、現世利益、例えば「才学のこと」を祈ったのでしょうか。

この文章は『一松町新聞』48号（2021年4月30日）に「法輪寺」と題して寄稿した短文をもとに初老祝いの思い出を加筆したものです。その時に法輪寺のことを調べようと思って、まだ着手できていません。なお本稿の執筆に当たっては、『日本地名大辞典 京都市の地名』平凡社「法輪寺」および『世界大百科事典』平凡社「十三参り」を参照しました。

学校という社会への第一歩： ドイツの基礎学校への入学

国際言語文化センター兼任研究員 藤原 三枝子

小学校入学のシーズンになると、「一年生になったら 一年生になったら 友だち百人できるかな」という童謡が流れ、それを聞いたり歌ったりしたことがある人は多いでしょう。同じように、入学の時期になると繰り返し流されたテレビのCMに「ぴかぴかの一年生」というものがありました。日本中のあちこちで、小学校への入学を待つ子供たちの様子は、最後に流れる「ピッカピカの一年生」のメロディーとともに、随分と人気だったように思います。こうして、小学校への入学は、子供にとって人生の大きな節目であり、また、地域社会が子供を迎え入れるお祝い事とも言えます。

2003年度の後期に半年間、ドイツのベルリンで過ごしたおり、知人に連れられて基礎学校（日本の小学校）の入学式の様子を見ることができました。ドイツの新学期は秋に始まります。そこで見た光景は、日本の入学式とはかなり異なりました。十人十色の服装の子供たちが、どの子も自分の背丈ほどもある大きな円錐状のものを大事そうに持ち、整列するでもなく、それでも



秩序を乱すことなく、講堂の前の方に集まっています。このとんがり帽子のようなものは、「ツッカートウーテ」(Zuckertüte) あるいは「シュールトウーテ」(Schultüte) と呼ばれ、家庭で準備して入学式に持たせるものです。中には、学校（シュール）でのこれから学びの大変さを甘くする、という意味でしょうか、お砂糖（ツッカー）の入った甘いお菓子や、学習に必要な文房具などが入っているようです。



乳幼児から特定の言語・文化共同体の一員となっていく社会化の過程で、小学校の教育理念は、子供のアイデンティティの形成に大きな意味をもちます。ドイツ語では教育を Erziehung と言いますが、日本語の「教育」と「Erziehung」の根底にある考えが異なっていると常々感じています。人は生まれた時には同じ能力をもっているのだから、教師や親が教育することによって、等しく成長する（だからがんばりなさい）という考えが「教育」にはあると思います。一方、Erziehung, erziehen はもともと「引っ張り出す」という意味が根底にあり、子供が本来持っているものを引き出すという考えが基になっていると私は思っています。一人ひとりが違ったものを持っていることを前提とした人間理解です。

ドイツ語圏の文化・社会関連の授業で、日独の教科書比較を行うことがあります。日本の小学校の生活科にあたるドイツの基礎学校の科目に、「事実授業」(Sachunterricht) があります。基礎学校の基本的科目として、1年生から最終学年の4年生まで続きますが、社会科や理科、環境教育、交通教育、外国人との共生などを含む合科的な性質を持つ科目です。ドイツの学校教育の目的の一つに、「政治的陶冶」(Politische Bildung) があります。これは、民主主義的な社会生活を営むことができる市民を育成することを意味しますが、例えばニーダー・ザクセン州では、「学習者を民主主義社会の一員として政治的・社会的決定に関与できる自己-共同決定能力を持った市民に育成すること」がめざされ、この教育は初等教育段階では事実授業において行われます(天野他 1998: 166-167)。今、手元にある事実授業1年生の教科書の第1課のテーマは“*Ich bin ich.*”（「私は私。」）です。一方、同様に私の手元にある日本の生活科の教科書の第1課では、「みんな ともだちになろう」がテーマで、また、「国語」の教科書の第1課の文章も「みんな ともだち いちねんせい」で締めくくられています。

授業では、「日独の教育の目的の違いはどこからくるのか」、「日本の教育は自己を蔑ろにすることに繋がるのではないか」など、学習者自身が、抱いた疑問に対して思索をめぐらしそれを共有し、新たな気づきに繋げることが目標です。

天野正治他(1998)『ドイツの教育』東信堂

ツッカートウーテを持った子供たちの写真：Lisa Maria Polig さん、Ingeborg Braa さんより提供

フランスにおける人生の節目の誕生日の祝いについて

国際言語文化センター兼任研究員 中村 典子

フランスにおける人生の節目のお祝いについて考えたとき、筆者の脳裏に最初に浮かんだのは、**聖カトリヌ祭 (Fête de la Sainte-Catherine)** のお祝いです。大学4年次のパリ留学中、庶民的なレストランの隣席にいたジョジアンヌ (Josiane) さんと懇意になり、彼女の家でのお祝いに招待されたことがあったからです。当時、彼女は25歳で *mademoiselle* (未婚の女性) でした。「若い女性の守護聖人とされる**聖カトリヌ (聖カタリナ) の日である11月25日**、未婚の25歳の女性は、聖カトリヌのシンボルカラーとされる黄色と緑を基調にした華やかな帽子¹を被り、聖カトリヌに夫を見つけてくれるようお願いし、お祝いをする」と当時、説明されました。しかし、現在、生まれてくる子供の6割強が婚外子²であり、2013年から同性婚が認められているフランスでは、聖カトリヌ祭の伝統を守るのは時代錯誤だという反発もある³ようです。

現在、フランスにおいて人生の節目となる最初の年齢は、成人となる18歳の祝いです。その後は、20歳、30歳、40歳、50歳、60歳というように **10年ごとの節目に本人が自分の誕生日会を開く習慣**があるようです⁴。ただし、周りがお祝いをするのではなく、節目の誕生日を迎える人自身がホストとして会を計画し、自宅やカフェ・バーなどへ家族や友人を招待することになります。20歳の祝いであれば、ケーキと飲み物で祝うこともありますが、30歳や40歳の節目には、10人前後の友人や同僚を昼食か夕食に招待することが多いようです。その際、招待された人は、飲み物とかデザートとか、何か一品を持ち寄ってお祝いの会に参加するのが普通です。時には、招待された人たちが共同で「秘密のプレゼント」をホストに贈ることもあります。特に40歳になる節目は、社会人として経験を積み、いろいろなことに自信を持てるようになる時期でもあり、親しい人たちへの感謝の気持ちを示すために盛大なパーティーになることもあるようです。そして、60歳の節目にも、大きなお祝いの会を本人が企画することが多いようです。フランスの現在の定年は62歳であるため、退職後の人生を見据えたパーティーを行うことで、遠方に住んでいる家族や友人たちとの交流を深めるという意味もあります。なお、定年については、現在、改革案が提出されており、定年を2030年から64歳に引き上げたいマクロン大統領、ボルヌ首相 (Élisabeth BORNE) と、定年を延長されたくない労働組合や市民の間でのせめぎ合い、市民たちの抗議デモが続いています。

さて、こうして10年ごとの節目の誕生日を、友人や同僚を招待して祝うのは何のためでしょうか？

フランス人は社会人となっても、家族や親しい友人との関係を非常に大切にします。「仕事が忙しいから」という理由で家族の行事に参加しないとか、友人と会わないことは、あまりないようです。**法定労働時間が週35時間で、法定の有給休暇5週間をほぼ消化するフランス人**は、仕事と同じくらい家族や友人を大切にします。また、40歳の節目の誕生日会に同僚を招待するのは、職場においても、自分がある程度、満足した人生を送っていることを示す意味もあるとされています。こうした節目のお祝いに関しては、**marquer le coup (出来事を記念して祝う)** という表現がよく用いられます。ただし、余分な費用をかけずに持ち寄りパーティーが基本となります。また、こうした節目の誕生日会を祝うかどうかは、ホスト本人が決めることであり、まったくお祝いをしない人もいます。同調圧力がほとんどなく、個人主義が強いフランスの特徴がここにも表れているかもしれません。



Joyeux Anniversaire
(iStock.com/ nito100)

注¹ La Sainte Catherine Jean-Marc Coquelle を YouTube で検索してください。

(<https://www.youtube.com/watch?v=ieltbgkkIFo>)

注² 参考資料：Part des enfants nés hors mariage のグラフより (<https://www.insee.fr/fr/statistiques/2381394>)

注³ 参考資料：フランシュ・コンテ地方で France 3 が実施したアンケートによれば、この伝統を守ることに40%の人が賛成し、21%の人がやめるべきだと考えている。(Emmanuelle RINGOT, « Pourquoi fête-t-on encore les célibataires à la Sainte-Catherine ? »)

(<https://www.marieclair.fr/sainte-catherine-pourquoi-celebre-t-on-les-celibataires-le-25-novembre.834054.asp>)

注⁴ 本学のフランス語非常勤講師のバープ (Alexandre BARBE) 先生に詳しく教えてもらいました。

中国語文化圏における人生の節目の行事

国際言語文化センター兼任研究員 胡 金定

人生の節目に行われる古来の伝統行事が人生の成長段階により、色々あります。日本ではお母さんが妊娠して5ヶ月目頃の戌（いぬ）の日に、さらし木綿を長さ7尺5寸3分（七五三にちなむ）に断ち、下腹に巻きます。戌の日に行うのは、犬が安産であるとされている事から、それにあやかるためです。また、お七夜という生後7日目のお祝いで、生まれた子に名を付け、社会の一員として仲間入りしたことを認めてもらう儀式が行われ、名前が決まりますと、名付け親は奉書などの白い紙に清書し、神棚に供えて、床の間に貼っておく風習があります。役場への出生届は戸籍法に基づき、生後3日目から14日までに済ませなければなりません。同時に、名前も届け出るようになっていきます。

中国文化圏における人生の節目の行事も多く残されています。今回は赤ちゃんの行事を紹介します。

中国では赤ちゃんが誕生し、健やかな成長を願って、子が生まれた家庭は殻を赤く染めたゆで玉子「红鸡蛋（hóng jī dàn、赤い卵）」を赤の袋に入れて、親せきや職場で配り、あいさつします。「赤」は縁起のいい色とされていますので、「红鸡蛋（hóng jī dàn、赤い卵）」には、子供の誕生を祝福するという意味が込められています。

中国56の民族はそれぞれの習慣や慣習は異なりますが、赤い卵は、中国人にとってよいことです。

また、赤ちゃんに贈られる「长命锁（cháng mìng suǒ、長命ロック）」を贈る習わしがあります。「长命锁」は中国伝統の装身具で、金・銀の鈴や飾りが付いたアクセサリーです。子供の手首や足首に付けて子が元気に長生きするよう願います。

中国語の「锁（suǒ）」は日本語で「鍵」、「錠」の意味です。「锁（suǒ）」はロックという意味から古代中国のマスコットとして、平安や長寿を守ってくれる寓意がありますので、平安锁や长命锁は、大人が着用することを好むだけでなく、小さな子供たちも同様に手に付けるのが大好きです。

一般的に「锁（suǒ）」は、長命百歳、平安富貴などのスタイルで刻まれ、また、心のような形に作られています。どのような「长命锁」も、幸運を守ってくれる願いを表現する意図が込められています。

中国では出産後一ヶ月日以内に役場への出生届と名前「大名（dà míng）」を届け出る必要があります。届け出る名前は「大名」と言い、大人になってからもずっと使う名前です。また、中国人はほぼ全員が「小名（xiǎo míng）」という幼名を持っています。

「小名」は、正式な名前とは別につける名前、愛称のような位置づけです。日本でいう「ニックネーム」みたいなものです。小さい頃は家庭内や親戚や親しい友人の間で子を幼名で呼ぶのが一般的です。

「小名」の付け方ですが、本名（大名）から漢字を一文字とり、それを二つ繋げる「小名」が一般的だが、中には名前と全く関連のない小名を付ける家庭もあります。

二音節（同じ漢字二文字重ねる）で呼ぶのが普通なので、呼びやすく、かわいらしく、明るいイメージを連想します。敬称をつけず、二音節の呼び捨てが多いのです。

例えば、李娟（女の子）であれば、娟娟、小娟など。男の子で李勇であれば、小勇、勇勇、勇狗（狗=犬）などです。

また、赤ちゃんが生まれてから30日目、これを「满月（mǎn yuè）」と言います。一般の家庭では、赤ちゃんが「满月」を迎えるその日に、親しい友人を招待し、赤ちゃんの「满月」を祝う宴を開きます。招待客は、紅包（Hong bao、中国の祝い事で赤をあしらった祝儀袋を用いることから、お年玉を含む）といわれるご祝儀やお祝いの品を持って参加し、赤ちゃんの健康で健やかな成長をお祈りします。

生後100日になると、百日は、百歳とも言われます。つまり、赤ちゃんが100歳まで生きられますようにとの願いが込められています。

この日は、祝福の宴を家族で行ったり、親友を招待したりします。このほかに、この百日の日に赤ちゃんは人生で初の剃髪をします。両親が子どもの体毛、そして眉毛までも剃ります。このようにした後に生えてくる毛は黒くて、つやつやしていると思われています。



「红鸡蛋
(hóng jī dàn、赤い卵)」



赤い袋にゆで玉子を



長命百歳



長命富貴

韓国社会における節目の誕生日の祝い

国際言語文化センター兼任研究員 金 泰虎

韓国社会では、冠婚葬祭という人生儀礼の節目だけではなく、節目の誕生日にも宴会を開き祝う習慣があります。その節目の誕生日とは、「첫돌 (チョッドル)」(1歳の誕生日)、還暦=還甲=回甲=甲午=華年=周甲=換甲(60歳)、進甲(61歳)、美寿(66歳)、古希=稀寿=七旬(70歳)、喜寿(77歳)、傘寿=八旬(80歳)、米寿(88歳)、卒寿=九旬(90歳)、白寿(99歳)、上寿(100歳)です。

初誕生日を祝うことは、前近代の韓国では幼児死亡率が非常に高く、1歳の誕生日を迎えることができずに死亡する子供が多かったからです。1歳の誕生日を過ぎると、免疫力も高まり、生き延びる可能性が高いと考えていたことでしょう。

初誕生日の後、韓国社会では節目と位置付けられていない誕生日でも誕生日には欠かせないワカメ汁を用意するなどして祝いますが、盛大に行うのは60歳の誕生日である還暦です。上記の60歳を意味する様々な名称は、前近代の東アジア社会における年を表すことから生まれています。つまり、10干(甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸)と12支(子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥)を組み合わせると、60年目にその組み合わせが終わり、61歳で出生と同じ干支が始まります。したがって、60歳は還暦、61歳は再び同じ干支が始まるので「進甲」と言います。例えば、己亥年に生まれた人は、60歳で10干と12支を組み合わせた年が終わり、61歳から再び同じ己亥年が始まります。

韓国社会に西洋医学が伝わって定着し、その医療の力を発揮するまでは、還暦を越えて生きる人が少なかったのです。例えば、朝鮮王朝(1392～1910)は518年間(1897年からは大韓帝国、皇帝とする)にわたり存続し、27名の国王が即位をしていますが、歴代国王27名の平均寿命は47歳です。とりわけ、前近代の韓国では還暦まで迎える人が少なかったため、朝鮮王朝時代の貴族層である両班家では、還暦からの節目の誕生日には長生きを願う儀礼の「寿筵礼」を催します。この寿筵礼の様子を描いている絵巻は数多く残されており、韓国国内の博物館などで目にすることができます。

ところで、韓国では1歳の誕生日と60歳の還暦に銀製の匙と箸をプレゼントする共通の習慣があります。この習慣の狙いは、食べ物を口に運ぶ食具である匙と箸を使いしっかり食べなさい、つまり匙と箸を使い絶えず食べると長生きできるという意味合いです。この銀製の匙と箸は、幼児や歳を取った人の食事に役立ちます。なぜなら、幼児や歳を取った人は料理の冷熱の判断が鈍い傾向にあり、熱の伝導率が優れている銀製の匙を、スープのお椀に挿しておき匙をとると、料理の冷熱具合が判断できます。なお、銀製の食具は毒が混ざっている料理の場合は、その色が変わるとも言われています。要するに、誕生日のプレゼントや祝いは、長生きしてほしいという願いが込められていると言えます。

伝統的に韓国社会では、節目の誕生日の中でも1歳の誕生日、還暦は盛大に祝いましたが、他の節目の誕生日は質素に行いました。初誕生日のお膳立てや祝いについて今回は紙面上、省くことにします。還暦以降の節目の誕生日は、家系や家庭によって祝いの大小には多少の差がありますが、概ね質素に祝う進甲に準じて古希、喜寿、米寿を祝いました。

しかし、医学の発達によって平均寿命が長くなり、節目の誕生日を祝う時期も変わりつつあります。今日でも1歳の誕生日は変わらず盛大に祝いますが、ほとんどの家庭では、還暦は盛大に祝いません。その代わりに古希、または傘寿を盛大に祝う傾向にあります。古希は、杜甫の詩である「曲江」の中の「人生七十古来稀」から由来していると言われています。古希を迎えた学者の場合、弟子や研究仲間が集まり「古希記念論集」を出版することがあります。

次の写真は、今日、ホテルなどで行う古希を祝うお膳立ての事例です。「古希床」と言いますが、還暦をはじめとする盛大に誕生日を祝う際のお膳立てです。高く積み上げるお膳の食物は、長寿の祈願と尊敬の念を表します。

この祝いの席は、直系子孫である子息や孫などが主導になり開きます。祝いに当たり主人公は、写真にみるお膳立ての奥側、つまり「万寿無疆」と書いている壁(場合によっては、屏風を用いる)の前に座ります。子息や子孫、親戚などの人々は写真の手前で主人公に盃を捧げてお辞儀をします。この儀式が終わると、主催者と共に招待された親戚、友人、知人などの来客は、食事を交えての宴会を行います。

このように、韓国社会では前近代から現在に至るまで誕生日を祝っていますが、還暦をはじめとする盛大に祝う節目の誕生日だけは、特別なお膳立てをもって長寿を祈願する風習が未だに根強く残っています。





「人生の節目」考



国際言語文化センター兼任研究員 谷守 正寛

本誌の主題「人生の節目」の行事は多くありすぎて地域によっても違いがあり、今時はネットでググれば幾らでも一覧も出るので、碌に行事もせず故に知らない人間が1頁にまとめて行事を紹介するのも僭越かと思ひ、紙幅の関係上もあり、日本語に携わる立場から「節目」一語に絞って言語面から一考してみたく思います。

さて先ず、次の記事の見出しにある「節目」をあなたはなんと読むでしょうか？

「五冠に挑む藤井聡太竜王、師匠の「節目」は記憶にも残る対局に」

(朝日新聞デジタル 2022年2月4日)

この見出しはなかなか意地悪な表現で、もしや節目を「ふしめ」と読みませんでしたか？これにふりがなは付いていませんが、実はこの「節目」はどうやら「ふしめ」ではないようです。「えっ？」と思う人は多いと思いますが、次の記事を見てください。

「藤井四段最年少50勝に「節目（せつもく）の数字」

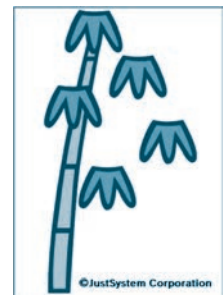
(日刊スポーツ 2017年11月21日)

最初の記事よりだいぶ前の記事ですが、ご丁寧に「せつもく」と振ってあります。そこで、これについて少しく追究してみます。記事には「落ち着いた指し回しで熱戦を制した藤井は『全体的には自信のない局面が続いていた』と振り返り、大台到達に『1局1局指してきたのが節目（せつもく）の数字となりました』。デビュー50勝目の区切りのことを『節目（ふしめ）』とは言わず、『節目（せつもく）』という言葉で表現した」とあります。巷でも言われていますが、これが弱冠15歳だった藤井氏の間違いではないらしいのです。

そこで辞書等で「節目」を確認すると、学研漢和大辞典には、[一]（セツモク）①規則・法律などで小さく区分された箇条。②木のふしと木目。[二]《日本語での特別な意味》（フシメ）木材のふしのあるところ」とあり、人生の節目（ふしめ）が見当たりません。大辞林では先ず「せつもく」が載せられ、「①草木の節（ふし）と木目（もくめ）。ふしめ。②小分けにした一つ一つの箇条。細目」、そして「ふしめ」として「①木材や竹の節となっているところ」に続いて、漸く「②物事の区切り目。『人生の一』」と出てきます。

ということは、まだ中学生だった藤井棋士は訓読みを知らなかったのではなく（むしろ一般に音読みを知らない人が多い中で）、敢えてデビュー50勝目を人生における大きな「ふしめ」とは捉えず、今後も続く長い人生の中で安易に油断してはならない途中の単なる一過程にすぎないと冷静に考えたとも推測できます。人生の大きなふしめだと慶んで行事をする伝統的な枠組みに囚われない将棋の名手ならではの冷静な人生観が窺えます。

「節」については、古くは竹取物語の「ふしを隔てて、よごとに金ある竹を見付くこと重なりぬ」のように「ふし」と節間の空洞部を「よ」とも呼ぶ場合があり、源氏物語では「思ひさますふしにもせむとまもれど」とあるように「きっかけ」という抽象的意味もすでにありました。恐らく中国語の漢字「卩」（jié、元は tzyet）から「せち」となり、季節の変わり目を指し、これが転じて「季節」の「せつ」になったと言えるようです。このようにいずれも古くから日中語に併存した類義の語だったためにややこしくなったのでしょう。



道元の「正法眼蔵」（13世紀）に漸く二漢字語の「節目」が「せつもく」として出てきますが、まだ「ふしめ」ではなく「区分された各項目」の意味のままのようで、また、「重々しい節の日」と併行して、～五節供三節供には限らず、～毎月の日待月待までを、鹿児島県などではみんな折目節目（せちめ）と呼んでいる」（柳田國男『年中行事覚書』）のように、方言には「せち」と「め」の音訓組合せが残るなど、ややこしさを引き継がれる歴史的にユニークな過程を経ているのが面白いところです。

訓読みの「ふしめ」となってやっと「人生の大きな区切り」の意味になったとしても、そもそも竹の節は均等で大小ありませんから、一手一手コツコツと駒を置き、たとえ決定的な王手であっても、人生を歩む上ではいずれも単なる一区切り（節）として平等かつ冷静に捉えた藤井棋士の言う正法眼蔵風の「せつもく」は見事に達観した言葉選びですね。

ケベック大学 モントリオール校 (UQAM) 語学学科とモントリオール国際研究所 創設 25 周年 (2022 年) を祝う国際集会にて 「大学における外国語の役割」の研究を推進

国際言語文化センター兼任研究員 中村 典子

本学の協定校であるカナダのケベック大学モントリオール校 (Université du Québec à Montréal : 略称 UQAM) は、カナダでも特に言語教育に力を入れている語学学科 (École de langues : エコール・ド・ラング) があることで有名です。ケベック大学は、フランス語を唯一の公用語とするケベック州の州政府が創立した州立大学で 10 の分校があります。本学は、ケベック大学モントリオール校 (UQAM) のほか、ケベック大学トロワ・リヴィエール校 (UQTR) とも協定を結んでいます。



UQAM の校舎

1969 年に創立された UQAM が特に重視しているのが国際交流です。2022 年秋の数字¹で、約 35,000 人の学生 (聴講生等も含む) のうち、約 4,800 人が世界 95 カ国からの留学生です。留学生たちがフランス語の上達を目指すための授業を受け、また、さまざまな言語を学ぶ機関がエコール・ド・ラングなのです。ここでは、第二言語としてのフランス語・英語のほか、ドイツ語、アラビア語、中国語、スペイン語、イタリア語、日本語²のプログラムが毎年、提供されています。さらに、ブラジルのポルトガル語、ロシア語、ケベックの手話なども提供される場合があるようです。

英語とフランス語を公用語とするカナダ連邦の人口は 3900 万人弱ですが、毎年 40 万人を超える移民を受け入れており、2021 年は、コロナ禍にもかかわらず、約 43 万人を永住権を持つ移民として迎え入れました。2025 年は、50 万人の永住者の受け入れが目標³であるそうです。現在、人口のほぼ 4 分の 1 に相当する 23% の 830 万人以上⁴が移民の出自を持っているカナダは、先進 7 개국 (G7) の中で移民の割合が最も高い「開かれた国」です。カナダの移民政策は、若い人を受け入れ、労働力を確保することが目的で、永住権を得るためのポイント制⁵があります。最近の移民の大多数 (92.7%) が、フランス語または英語で会話を続ける能力があるという結果が出ています。

カナダにおいては、複数の言語をマスターしたり、さまざまな出自の人々の多様な文化を理解する「多文化主義」の実践が推奨されています。コミュニケーション学部にも所属するエコール・ド・ラングでは、創設 25 周年 (2022 年) を祝う国際集会⁶にて「大学における外国語の役割」のパネルディスカッションが開催されました。また、モントリオール国際研究所 (IEIM) と連携し、言語と文化を不可分なものとして捉えて「スペイン語圏週間」「ドイツ学の日」「日本学の日」といったテーマで言語教育に関する国際学会⁷を毎年、開催しています。UQAM のエコール・ド・ラングが大学教育における言語教育と多様な文化理解を推進する重要な機関であることの証左であると言えます。

1 出典 <<https://uqam.ca/information/chiffres/>>

2 日本語の専任の先生が本学との提携を強力にサポートくださっています (現在は神崎先生です)。

3 出典 <<https://www.jetro.go.jp/biznews/2023/01/7351d2ce5c80d1e5.html>>

4 出典 <<https://www150.statcan.gc.ca/n1/daily-quotidien/221026/dq221026a-fra.htm>>

5 カナダの移民制度は、年齢や就業経験、英語およびフランス語の能力が点数化されるポイント制になっています。

6 出典 <<https://actualites.uqam.ca/2022/ecole-de-langues-25-ans/>>

7 出典 <<https://ieim.uqam.ca/auteur/ecole-de-langues/>>



地下鉄の駅 Berri-UQAM と直結した UQAM 校舎の入り口